

# 現代若者問題の起源

## 子ども・若者を支えてきたもの

**奥平康照** 所員／人間関係学部教授

### 1——思春期・青年期の社会的未熟性・逸脱性

思春期・青年期にある子ども・若者は、大人からは理解しがたいような、とんでもない行動をしてしまうことがある。多くの子ども・若者は、そうした逸脱行為を強烈な印象を残すような形で経験することなく、その時期を通過してきたのだが、しかし大きな逸脱の可能性は、ほとんどどの子どもも持っているし、かつてももっていたと言っている。

たとえば実際にあった話だが、中2のクラスでいじめがあった。担任教師の指導によって、いじめ被害者の子どもの話を聞き、加害者もクラスの仲間も十分に反省をして、長い討論があって、いじめを起こさないクラスづくりを、子どもたちは涙とともに誓いあった。そしていじめ問題はクラスを超えて、学年各クラスで論議され、学年集会が企画された。いじめのあった当該クラスのリーダーが起草した学年決議を、そのリーダーは心をこめて集会のまとめとして読み上げた。その日の午後、担任が教室に入ったとき、信じられない光景に出くわした。そこで明らかにいじめが行なわれていた。しかもその中心になっているのは、午前中に学年決議を読み上げたあのリーダーの生徒であった。反省の涙も乾かないうちに、いじめを繰り返す子どもたちに出あって、教師は子どもが分からなくなり、信じられなくなった。

かつて、いじめがあった、ウソもあった、裏切りもあった。しかし教師に指摘されるまで、午前中の自分と午後の自分の矛盾と落差に気がつかないというようなことは、昔はなかった、この幼稚さはどこからくるのか。そういうコメントが、上のような事例の後に付け加えられることがある。

しかし上のコメントは大事な点を見逃している。現在の思春期・青年期の子どもたちは、その生活過程・環境の変化のために、その幼稚さの暴走（出現）を抑えることが難しくなっているが、上のような「幼稚さ」「未熟さ」を誰でも抱えているということでは、昔も今も同じだということ、この点である。いじめを反省し泣いた自分も、午後からいじめを面白がっている自分も、教師に見つかって

青くなる自分も、それぞれに偽りのない自分であったにちがいない。大人である私もあなたも、同じような幼稚さを抱えていたのだが、その幼稚さの記憶を、私たちは残念ながら失っているのである。

その例証となりそうな事例の一、二を示しておく。

大正から昭和にかけて、文壇のリーダーとして有名であった菊池寛（1888年生まれ）は、高松藩の藩儒ではあったが貧しい士族の家に生まれ、早熟の少年であった。小学校4年生のころには新聞や小説を読み、「恋」という字の読みも意味も知っていた。旧制第一高等学校を経て京大英文科へ、という経歴からしても、成績のよい少年だったはずである。その彼が13歳のころから1年間近く、町中の商店から友だちと組んで盗みを繰り返していた<sup>(1)</sup>。それが悪いことだと分かっていたから、仲間内の隠語で話し、自分たちの悪事がばれないようにもしていた。別件の取調べの際に、仲間の一人が自分の盗みをしゃべってしまったので、仲間みんなの万引きが、学校に知られてしまった。注目すべきことは、万引き行為そのものではない。捕まって、父にも知られて、「万引き」をしたと言われたそのときの少年の反応である。

家へ帰ったとき、父はまた煙管で私を殴った。

「万引きをしていたんじゃないか、万引きを」

そう言って、父は口惜しそうに、母に報告した。私は……講談などで、毒婦などがよくやる万引きということを知っていた。私は、自分のしていたことがその下品な怖い言葉で説明されたので、ハッと思った。……

私は、自分がやっていたマイナスということ、父や母の言うような賤しい怖いこととは考えられなかった。いな少なくともそのときまでは、考えていなかった<sup>(2)</sup>。

12、3歳とは、そういう未熟さを抱えた年齢なのである。そして大人が忘れてしまっている未熟さは、もっと後まで続くようである。

R.D.レイン（1927年生まれ）は、開放病棟による治療方法を切り開き、実践したことでも高名な、イギリスのスコットランドの精神科医である。医師・著述家としての経歴が華々しきだけでなく、少年時代から俊英として認められていた人であった。12歳の時にはロンドン王立音楽学院から、奨学金を出すので入学しないかと誘いがあったくらい、音楽の才にも恵まれていた。中等学校卒業の時には「きみのギリシャ語とラテン語の学力は優に文学修士並みのレベルだ」と古典語学科の先生に言われるほどだった。しかし彼は音楽の道にも学問研究の道

(1) 数年であろう。とすれば、今の小学校6年生から中学校1年生の秋まで1年間の万引きである。

(2) 菊池寛『半自叙伝』講談社学術文庫、1988年、24—25頁。

にもすすまず、医学の道を選択する。グラスゴウ大学医学部で熱心に学んだ後、グラスゴウ・アンド・ウェスト・オブ・スコットランド脳神経外科で、インターンとして働く。そこは、景勝地ロモンド湖の近くであって、オートバイや自動車事故で、脳みそがしみ出ている人がしばしば運び込まれた。

学生時代に私は、冬のさ中に何度も、晴雨にかかわらずあらゆる天候の中で、ギネス・ビールとウイスキーをしこたまきこし召して八十マイルの時速でロモンド湖の西岸のうねりくねった道路を行き来したものだ。

私の親友が二人もその道路で死亡した。だが、当時はたいがいヘルメットをかぶらずにやっていた酔いどれオートバイの運転への嗜好を私が本当になくしたのは、押し潰された頭蓋や、しみ出す脳味噌を見るようになってからだった。……

へべれけに酔ってあの急な曲がり角をつっぱしって行った時のことがスローモーション映画のように私の頭の中で再現された。あの当時には感じたこともなかった後悔、安堵、パニックが、私に波状攻撃をかけた。私たちが他人の生命を危険にさらさせたことにたいする恥ずかしさ。次から次へと良心の呵責が波となって襲ってきた<sup>(3)</sup>。

レインでさえも、そのように「愚か」だったのである（若者のこの「愚かさ」は、社会的には非難されるべきことである。若者は社会的規範を十分に我が物にしていない、あるいはときどき見えなくなるために、そこから逸脱するのだが、しかし社会的規範が見えなくなるその社会的未熟性は、若者の社会革新力の源泉であるにちがいない）。

大人から見るとあまりにも理解しがたい子ども・若者の社会的未熟性は、昔も今も人間の発達の本性ともいうべきものとして、いつでも、どの若者にも、存在し続けてきたと見るべきであろう。しかしそのように見るとしても、現代社会の子ども・若者の逸脱をいつものこととして放置しておいていいと言うのではない。彼らの社会的未熟性が、どのように社会的現象の表面に現われ出るか、それとも統御されるか、それは歴史的社会的に条件づけられていることなのである。彼らが誰でも持っている社会的未熟性を消滅させることはできないし、消滅させようなどとする努力をしてはならないだろう。しかしその、悲劇的な暴走・暴発は、避けることができる。

もっと一般化して言えば、子ども・若者の社会的未熟性=社会的逸脱性と、社会化=社会適応性との関係が、社会破壊・崩壊的に現われるか、それとも社会革新・創造的に現われるか、重要な課題はそこにある。

---

(3) R.D.レイン、中村保男訳『わが半生』岩波同時代ライブラリー、1990年、169頁。

## 2——労働・生活必要規制からの解放

大人たちは自ら経験してきたことであるにもかかわらず、子ども・若者の社会的未熟性・逸脱性をほとんど忘れてしまっているから、若者への批判・非難は絶えることがなかった。おそらく歴史上のどの時代も、どの社会もそうであったにちがいない。しかしこの半世紀、特に日本社会において、大人と子どもとの断絶という感覚は、常に繰り返されてきたこととして放置するにすれば、かつてないほど大きいと言っていいだろう。子ども・若者の社会的未熟性・逸脱性そのものは変わっていないとするならば、今日まで続く世代間断絶感は、どこから来るのか。

社会的未熟性・逸脱性は、その発現を抑制するような環境あるいは生活過程のもとでは、よく規制され、発現も少ないが、抑制・規制体制が崩れると、大人から見て社会的に未熟で、逸脱した行動が噴出し、蔓延する。1950年代後半からはじまった日本経済の急成長によって、それ以前の基礎生活過程がもっていた、子ども・若者の社会的未熟性・逸脱性発現抑制・規制体制が急速に崩壊し始めたのである。

たとえば『やまびこ学校』（1951年）に生活綴方を書いた、山形県の山村の中学生たちは、遊びたくても、勉強したくても、学校に行きたくても、家の仕事の都合で、ままならずに、自分の子どもとしての当たり前の要求を我慢しなければならなかった。あれほど厳しい生活と労働を背負わなければならなかった子どもたちではなくても、1950年代までの子どもたちは、家族の生活と労働の必要に規制されて、自分たちの生活を統御せざるをえなかったのである。親が指示する労働負担は、子どもがそれを担わなければ、家族生活が成り立たなくなる客観的必然的必要を背景にしていた。子どもにもその必然性が理解できるほど明白だったので、親の指示にどれほど不満であろうと、従ったのである。

現代の子どもたちと較べて、当時の子どもたちがはじめから我慢強かったのではなく、従順であったのでもなかった。我慢を強いる生活過程の必然性によって、受忍を繰り返すうちに、そうした生活に耐えることもできるようになったのである。（それは、1950年代までの子どもたちに逸脱・非行・犯罪が少なかったという意味ではない。むしろ事実とは逆で、凶悪犯として検挙された少年の数は、現在の数倍もあった。しかしそれら凶悪犯として検挙された少年の大多数には、そうした逸脱にいたらざるをえなかったと、外からも分かりやすい事情・環境条件があった。）

ところが50年代末になると子どもたちの生活を規制していた、労働生活、家族生活、地域生活、つまり子どもたちの基礎生活過程が急速に変わり始める。そして今日にまで続く子ども・若者の急激な変化の時代に入る。1960年前後から70年代前半までを、子ども・若者の現代的変貌の第1期とするならば、その生態的特徴を形成した主導的社会生活要因は、労働・生活必要規制からの解放である。

生活必要規制からの解放は、親の生活や地域の生活にまで及ぶ。60年代にそれ

は徹底して進行し、70年代はじめまでには農村と都市とを問わず、生活の様相は一変した。70年前後の教師の報告には、生活基盤急変と、その下での子どもたちの新しい様相に心配し、とまどう状況が数多く記述されるようになる。以下は山形市近郊の農村の小学校教師烏兎沼宏之のレポート。

わたしの勤務地には、この二、三年来、ものすごい速さで農業機械が入りこんできた。三年前に一台入っただけだった動力田植機は、もう手植えがめずらしいほど普及しているし、稲刈機も、二条刈りから、三条・五条刈りへと大型化し、一年ごとに新型を購入するという状態である。それに加えて、自家用車、電化製品が生活の中に入りこんできた。そしてこれらは、ほとんどが前借で購入したものである。三年ほど前までは、一ヘクタールの田と五〇アールの畑があれば、それから上がる収入だけでもくらしていくことができたのだが、今では、村中あげて、賃稼ぎに出るようになってしまった。はじめは、父親だけで勤めに出て、母親が農作業を受け持つという時期もあったが、まもなく母親たちも、ぞくぞくと賃稼ぎに出るようになってしまった。近郊農村であるから出稼ぎはほとんどないが、スーパーマーケットの売り子、パチンコ店員、デパートや会社寮の清掃婦などを始め、ミシンの部品、メリヤス、かんづめなどの下請工場というように、まったく下積みの仕事に低賃金で働きに出るのである。それもはじめの頃は、冬だけの仕事であったが、しだいに、一年中通しての勤務となってきたのである。

親たちの生活は忙しくなり、家族共同の労働生活に子どもが参加し、そこで鍛えられるという機会はほとんどなくなる。後には、労働・生活必要規制の裏づけを失った親の叱責が残る。

烏兎沼が受け持っていた3年生の作文。

#### おとうさんをぶんなぐってみたい

ぼくが楽しい時は、ひるまでです。みんな、かせぎに行っているのでもいいのです。おこられなくてなんでもできるからいいのです。その中でも一番楽しいことは、おとうととけんかをすることです。おとうととじゅうどうもします。ひるまは、おこられなくてとてもいいのです。

いやなのは、夜です。夜はみんな帰ってくるからです。夜はテレビのあるへやをそっとぬけだして、十じょうまでけんかをします。

お父さんがしょうべんたれにくると、さっとつくえにすわって、べんきょうしたふりをします。おとうとがなくと、おとうさんにおこられるので、おとうとの口のところをむねにあてて、テレビのあるへやまできこえないようにします。ぼくの一番のねがいは、おとうさんをぶんなぐってみたいことです。

(後略)<sup>(4)</sup>

労働・生活必要規制を失って、すぐにアタマにくる子、「無気力・無思考・無感覚で衝動的な子、このどれもが多くの子どもの実態」<sup>(5)</sup>と見えるようになる。阿部進（『現代子ども気質』1961年などで「現代っ子」の生態を論じる先駆けとなった）らと現代子ども研究を推進したこともある横川嘉範は、子どもとテレビの関係をこう書いている。「子どもたちの多くは、『することがないからテレビを見る』『つまらないからテレビをみる』『たいくつだからテレビをみる』という」<sup>(6)</sup>。

労働・生活規制は家族生活の行動規範を支えていたのであり、その中で生きる子どもを統御していたのであるが、他方で子どもに生活的課題を提供していたのである。

### 3——生きる目的の不透明化と偏差値競争勉強という重荷

1950年代までは、生活＝生きることの目標は明確だった。暮らしが成り立つように、そして少しは余裕が生まれるように、なすべきことを日々行ない、少しの工夫をすることだった。子どもたちには、まずは親たちをモデルに、現前する社会をモデルにして、大人になっていくことができると見えた。その基礎の上に、さらにもっと働いて、もっと工夫して、もっと勉強して、親を超えて新しい生活を目標にする子どもたちもいた。この時代の子ども・若者の悲劇は、飢えや寒さや病に必要な最低の対応さえとれない、あるいはもっと高い目標と意欲をもって、進学したいのに、経済的理由などによってあきらめなければならない、などというようなことだった。

60年代の高度経済成長は、親にも子どもにも物質的余裕をもたらす。そして産業のあり方が根底から変化しはじめる。伝統的な労働と暮らしぶりでは、社会の変化に取り残されるようになる。いくつもの伝統的な職業は、新しい産業と生活によってつぶされていく。親たちも子どもたちも、親世代の生き方をそのまま継ぐのでは、次の社会では敗者になるかもしれないと感じるようになる。親あるいは家の職業継承によっては、将来生活への展望をもつことができるかどうか不安になり、子ども世代に残すべきものとして一番確実なものは、学歴だと見るようになる。

私は1955年に中学校を卒業したが、私の住んでいた東京都内の農村地帯の集落では、同学年6人のうち私以外の5人は、高校に進学しなかった。元地主をはじめ

(4) 鳥兎沼宏之「変貌する農村生活と子ども」『生活指導』1972年4月号。

(5) 東京・大田作文の会「70年代に向かうわれわれの実践」『作文と教育』1970年1月号。

(6) 横川嘉範「現代の生活・文化状況と子どもの発達」『生活指導』1973年4月号。

め農家の経済は、高校進学で困るような状態ではなかったし、勉強好きな子もいた。しかし簿記専門学校へ進んだ女子（自営業）を除いて、みんな中学卒で学校生活を終えた。ところがそれから11年後、1966年に中学を卒業した私の妹の同じ集落の同期生は、全員が高校に進学し、そして農家の3人は大学も卒業した。その間の10年の変化は、それほどまでに激しかったのである。

そして70年代前半には、高度経済成長の結果としての社会が、日本のどこでもできあがる。高校進学率は90%以上になり、大人たちからすると、勉強だけが子どもたちの仕事になった。

しかしその子どもたちから、生活に立ち向かう活力のエネルギーが薄れてきたのではないかという不安が、教師たちの間に広がった。たとえば60年代末の『教育』誌で、東京の住宅地にある小学校教師の遠藤豊吉は「子どもの生活の停滞」を書いている。

けんかをしなくなった、遊べなくなった、こぢんまりともものわりのよい子がふえた。「どんよりとした放心状態をみせる子どもたち」は、「かなり疲労しており、それはどうも、洪水を思わせるようなマス・メディアの氾濫、親の絶えざる監視からくる緊張と無関係ではない」との。

都立の有名進学高校教師の田代三良によれば、高校はいまや生徒の学習観転換の必要に応えなければならないのに、そうっていない。「僕が九年間受けてきた教育というのは、遅刻すれば職員室に呼ばれて正座させられる、それが嫌だから学校に遅れないでくるといことだ。勉強なんかについてもそうなので、ただ先生がこうしろというからしてただけだ」「勉強はなぜするのか全然わからないが、しないと不安だからしている」という生徒たちの言を引用しながら、高校は、学習への意味を再構成する必要がある、と述べている。入学の「当座は高校ペースに捲きこまれて無我夢中で過ごす、それも一年と続かない。かくて二年になるまでには〈強制労働〉的学習観はほとんど無効になる」。高校では、生徒の学習観の変革、および学習意欲をどう育てるか、を課題にしなければならない<sup>(7)</sup>。

労働・生活規制が消失して、多くの子ども・若者が立ち向かうべき生活課題をなくしてしまった。代わって、「勉強」という新しい規制が明瞭に現われたのに、どうしてそれが子どもたちの新しい生活課題にならなかったのか。単なる強制であって、主体的課題とはならなかったのか。

学校の勉強が主体的な学習・生活課題であるためには、条件がありそうに見え

(7) 遠藤豊吉「子どもの生活の停滞を超えるために」『教育』1969年12月号。

(8) 田代三良「高校教育における当面の課題——その問題状況と若干の実践について〈1〉」『教育』1969年12月号。

る。第1に、学習が実生活全体の課題と結びついていて、それを明確に担うと実感できるものであること、第2に、学習が共同の課題として学習集団の共通の関心事であることであろう。

学校生活で見せる子どもたちの無気力などの現象を憂慮して、70年前後には、『教育』などの誌上には、「実生活と教育との結合」や「生活綴方」の現代的意義を再発見しようとする論が盛んであった<sup>(9)</sup>。しかし坂元忠芳が言うように「生活綴方の歴史の意味は、…消費的、小市民性を克服して、生産者であるはたらく人々の生活との結合を深めてきたという点にある。この意味において『貧乏綴方』の名は、働く人民の貧しさと苦しさがこの地上からなくなれないかぎり、生活綴方がいつまでも背負っていかなければならない重荷である。それは、生活綴方の存在基盤でさえある」<sup>(10)</sup>のだが、子どもたちの大多数の生活と意識は、働く人びとの貧しさや苦しき＝貧乏からは、離れてしまっていたのである。小川太郎も「実生活との結合という原則が、もっと強調せられるべきであった」とかつての自分たちの論文について反省的に述べ、「生活綴方の教育的な価値」について、「実際の生活について真実を書き、語り、論じ合うという方法は、教育を書物の勉強にし、詰めこみ勉強にする、生活遊離の教育に対する、民主主義の教育の有力な武器である」と論じたが、同時に、60年代を通じて「子どもの生活の中から、遊びやサークル活動や労働などの実践的活動が衰弱ないし欠落している」という点を強調し、「実生活と教育との結合」は、「破壊されつつある子どもの生活そのものを再建させる仕事をふくまねばならない」と述べなければならなかったのである<sup>(11)</sup>。

「生活綴方」にしろ、「教育と実生活の結合」にしろ、その生活概念は、生産・労働を中核とする生活であった。しかしそうした意味では、70年代にはすでに、綴る価値ある生活も、結びつける価値ある生活も、見つけにくくなっていた。少し遅れて日本生活教育連盟の川合章が述べたように、最大の課題は「地域、家庭、学校での日常生活を生活の名に値する内容のある」ものにすることであり、学習意欲の基礎である「生活意欲を減殺させられている」<sup>(12)</sup>状態をどうするかである。小川のいうように、「実生活と教育の結合」のためには、「生活の破壊と貧困化を子どもに直視させるという生活綴方的な迫り方の外に、破壊されつつある子どもの生活そのものを再建させる仕事をふくまねばならない」。

しかし子どもたちの日常生活を、生活の名に値するものにするにはどうしたら

(9) たとえば、藤岡貞彦「日本農村の構造的変化と教育—再びみたび生活教育論争を」『教育』1968年4月号、坂元忠芳「生活綴方の今日的意義」『教育』1970年2月号、座談会「生活綴方の原像と現代像」『教育』1970年2月号、小川太郎「子どもの実践と認識をどう指導するか」再論『教育』1970年8月号、川合章「生活綴方への期待」『作文と教育』1974年11月号など。

(10) 坂元忠芳「生活綴方の今日的意義」『教育』1970年2月号。

(11) 小川太郎「子どもの実践と認識をどう指導するか」再論『教育』1970年8月号。

(12) 川合章「生活綴方への期待」『作文と教育』1974年11月号。

いいのか。生活を50年代にもどすことはできないのだから、現在の生活の枠の中で、子どもへの働きかけを工夫するより仕方がない。見つけ、表現するに値しない貧弱な生活では、生活綴方教育・学習も成立しなくなる。もはや生活綴方教育の歴史的任務は終わったという見方さえ現われた。

生活綴方教育に典型的に現われるように、表現する意欲と努力が生まれるためには、それを受けとめてくれる他者（仲間）がいなければならない。70年代になっても、個別的には深刻な生活困難にある子どもはいたが、その子どもの生活を、共通困難として共感をもって受けとめる学級仲間が見つからないところでは、当人もまた、自分の生活を見つめ、表現しようとする意欲を持続することはできなかったのである。

そうした中で、70年代の半ばに、生活綴り方実践で注目すべき成果をあげたのが、丹羽徳子である。彼女は、思春期にさしかかる小学校5、6年生の子どもたちに、「自分の心をえぐりだすことを通して自分を自由にしていく」「自分の心をしっかりさせるために、思いきって書く」「悩まなければ成長せん」「もっと困って困りぬくのよ」と語り、悩みや苦しみを書き、学びあう学級をつくりあげた<sup>(13)</sup>。自分の内面をみつめ、自分の成長をつくり出すという思春期の子どもが抱きはじめる思いを、共同の課題として意識させ、促進し、なし遂げさせることを、綴方の仕事にしたのである。生活綴方にはもともと、自分が主体的にかかわる生活を書くことによって、自分の内面変革をつくり出すという面をふくんでいた。丹羽はその側面をとりだし、強調して意識させた。それは自己告白・開示による内面変革・発展の綴方とっていい（丹羽実践は75-76年度の実践）。

丹羽実践成功の秘密は、思春期の子どもが共通して、しかし普通は一人ひとり孤立して行なう自己精神発展の苦悩を、価値あるものとして仲間の共感によって支える、そういう関係を学級につくりあげたことにある。書くことによる自己成長が共同課題になることによって、すぐれた作品がいくつも生まれた。内にかかえていることを子ども自身が書きたくなるまで待つという原則に、丹羽が固執したということも大事なことである。

丹羽方式の内面変革・発展綴方は、その後を受け継がれてすぐれた生活綴方実践の新しい形として発展していったようには見えない。内面を見つめることを主導的課題とするとしても、その素材は自分の生活である。子どもたちの生活の外表面と内面とが、切断してしまって、子どもたちは内面を表現する素材を失ってしまったのであろうか。今、小学校高学年生の多くは、塾に縛りつけられ、競争のための勉強を強制されて、共通に苦悩している。塾に行くのがつらいと泣く小学生がいる。その共通苦悩と丹羽学級の共通課題とどこが違うのだろうか。

---

(13) 丹羽徳子『明日に向かって』（上・下）1982年、草土文化。

#### 4——子ども・若者問題の時期区分

「現代若者問題の起源」という大きなテーマをかかげたが、以上述べてきたことは、大人と学校がいてきた従来の子ども像・観・生態は、日常労働・生活過程による規制によって維持されてきたものであり、実生活過程に存在した共通生活課題の上に成立した共同学習課題に依拠したものである、ということ、それらの前提は、高度経済成長期の生活変貌の中で、70年代前半までに崩壊し、現代の子ども・若者変貌の第1期が完了したことを示したに過ぎない。

そして、実生活過程の共通生活課題が、貧困からの脱出、労働と生産による生活の向上であった時代には、学校教育内容の中心の柱もそこに基礎を置いていた(生産主義・科学主義)のだから、共通生活課題が変質したのに、学校の内容が不変ならば、学校文化とそれを担う教師の地位低下現象が起きたのも当然である。

子ども・若者問題の第2期は、70年代中頃からはじまる。子ども・若者の生活観から経済発展の物語への同調に対する疑問が生まれ、消費文化世界が、学校生活と家族生活に並ぶ第3の場として、子ども・若者の生活領域の重要な位置を占めるようになる<sup>(14)</sup>。対抗して、学校は子どもたちへの管理統制を強化し、家庭と一緒に受験準備競争教育によって、子ども・若者の学校学習離れを食い止めようとする。

若者から労働・生活規制が消失しただけではなく、家族共存・生活規制も縮小過程をたどる。うるさい家族とがまんして一緒にいなくても、消費社会では金さえあれば、食はどこでも好きなものが手に入るし、寒さをしのぐ程度なら住の場もある。家族共存・生活規制からも解き放たれ、偏差値序列競争に巻きこまれた子どもたちは、孤立化し、ストレスを溜めこんでいく。孤立とストレスに押しつぶされた子どもたちは、存在する基盤を見失う<sup>(15)</sup>。

1980年には少年による殺人検挙者数は50人と戦後最低になりながら、一方では新しい形の少年凶悪事件が目立ち始める。学者一家での祖母刺殺事件(1979年)、川崎市での金属バット両親殺人事件(1980年)。また学校では、校内暴力多発、不登校の増加、いじめの深刻化、そして90年代に入ると授業崩壊・学級崩壊が広がっていく。

第2期と現代を区別するものは何か。90年代中頃以後、新しい社会条件が生じているように見える。一つは携帯電話やインターネットという、通信情報手段の急激な普及、二つには、学校から社会への接続が保障されなくなったこと、三つには、現代っ子第一世代(1950年以降生まれ)が、子どもたちの親になったこと。

(14) 中西新太郎『若者たちに何が起きているか』花伝社、2004年、83頁以下。

(15) これらの問題と少年犯罪との関係については、奥平康熙『少年犯罪は凶悪化しているか』『東西南北2001 和光大学総合文化研究所年報』、など参照。

- ・ ケイタイやメールなどの通信手段の普及が、子ども・若者の人間関係形成にどのような影響を与えていくか。それが共同の形に質的变化をもたらすものかどうか、重要であろう。
- ・ バブル崩壊に続いておこった就職難は、学歴をつければ、それに対応する職業生活を送ることができるという、学校と職業の接続保障を崩壊させた。その崩壊が、就職難時代の一時的なものか、それとも、景気回復の有無にかかわらず、今後若者世代の入職過程が新しい形態をとらざるをえないようになるのか。後者であると、子どもたちの学校への向き合い方と生き方展望に大きな影響が出てくるだろう。
- ・ 1960年生まれは、1970年に10歳であり、生まれたときからテレビを見て、労働・生活規制を受けずに育った世代であり、高卒以上の学歴をもっている。その世代の子どもたちが学校で主流となるのが、90年代後半であろう。

以上のような子ども・若者の育ちの条件変化が、どのような子ども・若者問題を生じさせているか、慎重に論議していきたい。

[おくだいら やすてる]